

文字生活研究における「景観文字調査」

高田 智和[†] 田島 孝治[‡] 米田 純子[†]

[†]国立国語研究所 [‡]東京農工大学工学府

概要

景観の中にあられる文字は、日常の文字生活を研究する上で考察の対象となりうるものである。本発表は、景観の文字・表記を、文字・表記研究の素材として扱う場合の可能性と問題点について検討する。また、景観文字を記録するためのツール開発の現状について報告する。

The linguistic and notational landscape survey for the study of Japanese writing system

TAKADA Tomokazu[†] TAJIMA Koji[‡] YONEDA Junko[†]

[†]The National Institute for Japanese Language

[‡]Tokyo University of Agriculture and Technology

Abstract

The landscape character is an object to study on the ordinary use of Japanese character. We discuss the effectiveness and the problem about the linguistic and notational landscape survey, and we also explain the developing system based on GPS for the purpose of landscape survey.

1. 文字生活研究

日本語の表記は、漢字、仮名、ローマ字と複数の文字種を使用し、世界の言語の中で大きな特色を持っている。漢語は漢字表記、和語は平仮名表記、外来語は片仮名表記と、語種と使用文字種との大局的な対応が、語表記の際の事実上の標準として運用されていると認められる。しかし、日常の事例では、「一層・一そう・いっそう」「微妙・ビミョー」のように表記形が複数ある語を観察することができる。また、漢字には異体字があり、「麵・麩」など漢字字体の違いが表記のバリエーションを生じる場合もある。

表記にバリエーションがあることは、日本語表記の特徴であると同時に、言語政策や言語教育、あるいは言語処理の上では、「表記のゆれ」として、好ましくないもの・あつてほしくないもののように扱われることもある。しかし、片仮名表記「ビミョー」は、感動詞的に使われることがあり、この場合には、単純な「表記のゆれ」ではなく、語彙的な意味やニュアンスの使い分けが、文字種の選択によって表記に反映しているものと考えられる。

表記のバリエーションの発生・消長の過程と要因、使用者・使用媒体・使用場面などの広がりや偏り、伝承の経路を探るためには、従来型の新聞・雑誌を対象とした用語用字調査に立脚するだけでなく、日常の文字生活に対象範囲を広げて、文字・表記を扱う視点が必要になってくる。

日常生活で接する可能性がある文字・表記を、文字生活の対象範囲とするならば、印刷や放送の文字である「読む文字」のほかに、街路の看板の文字などの「目にする文字」や、「読み書きの文字」に相当する手書き文字・コンピュータのデジタル文字が含まれる。図1は、横山詔一ほか（2008）で提示された、文字の生産過程を人間の認知の観点から捉えた文字生活のサイクルモデルである。文字生活の全体像を描くためには、接触頻度を推定するための文字の社会的使用頻度測定、すなわち文字の流通状態の実態調査と、人間の記憶を測るための認知実験と、社会と人間と双方へのアプローチが必須である。

印刷や放送の文字は、これまでの用語用字調査や、今後のコーパス活用によって実態を知ることができようが、日常目にする街路の文字や、手書き文字の実態把握は手薄である。手書き文字の実態調査は、調査方法の困難さから、今後も飛躍的な進展は見込めないものの、意識調査から実態を推定ことは可能であろう（高田智和・鎌水兼貴（2008））。また、街路の文字の実態調査は、景観調査の一部として、これまでも蓄積がある。

本稿では、街路の文字・表記を対象としたこれまでの景観調査を検証し、文字生活研究を構築する上での「景観文字調査」の手法について、利用機器と結果記録の面から可能性と問題点を検討する。

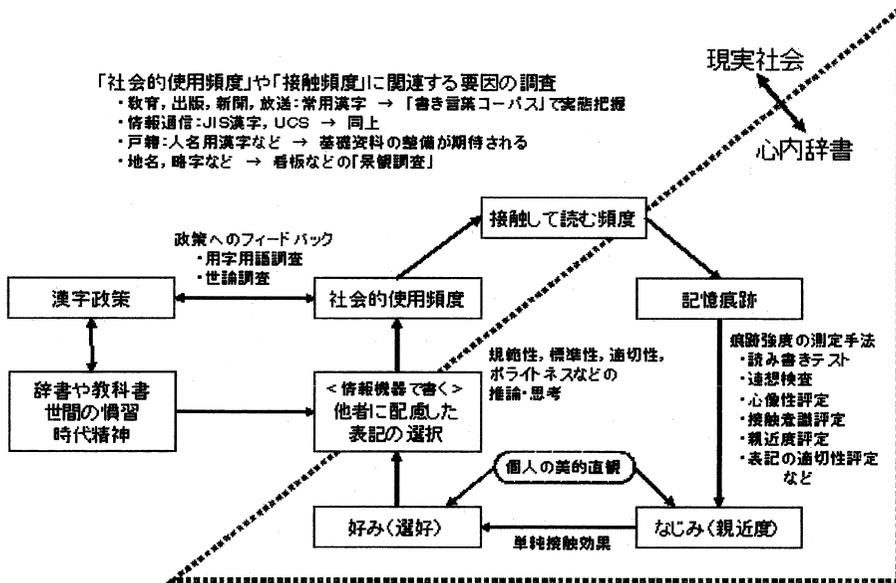


図1：文字生活のサイクルモデル（横山詔一（2008）より）

2. 景観の中の使用文字・使用言語調査

景観の中の使用文字・使用言語に関する調査は、地理学・日本語学・社会言語学の各方面から、それぞれの研究目的に応じて行なわれている。正井泰夫（1969・1983）は、文化地理学の観点から、日本社会の欧米化を、景観に表出した文字・言語によって考察したものである。宮島達夫（1995）は、一時滞在や居住外国人への対応によって生じる社会の多言語化を、景観の文字・言語から述べたものである。この流れは、Backhaus（2005・2006）、田中ゆかりほか（2007）など、近年の多言語化に関する社会言語学的な考察へと発展・継承されている。また、日本語学からのアプローチはいずれも実態調査で、中野洋（1985）による看板の使用文字の単字調査、染谷裕子（2002）、佐藤桂子（2003）による看板の使用文字種調査などがある。

このように、文字・表記を対象とした景観調査は、複数の研究領域それぞれの関心から手段として行なわれたものであり、景観言語学や景観文字学のような領域があつて、そのもとで行われているわけではない。そのため、同様に「看板」の文字・表記を扱っていたとしても、何を「看板」として扱ったのか、対象区域のどの範囲の看板を対象としたのかなど、サンプルの定義やサンプル取得の対象区域について曖昧な点が残る調査もある。手段としての景観調査は存在していても、他分野でのフィールド調査のように、確立した手法としての景観調査はまだないとみるべきであろう。

また、一枚の看板のすべての文字・文字列をサンプルとする調査の場合、採用されている分析の単位は、文字列を構成する文字の種類か、文字列によって表現されている言語の種類である。前者は日本語学分野、後者は社会言語学分野で主に用いられている。用語用字調査のような語の単位は、分析にあたってほとんど用いられていない（例外は中野洋（1985））。したがって、これまでの景観調査の大部分は、使用文字種調査か使用言語調査である。サンプルのすべての文字を単字単位で扱うような文字調査や、単語に分割していく語彙調査は手間がかかるため、手法として避けられてきたと考えられる。また、街路の看板には店名など固有名が多く含まれるため、他の一般語と同列に扱いにくいことも、語彙調査が行なわれにくい要因の一つに想定される。

さて、先行研究の調査には、経年変化や地域的差異を記述したものがある。正井泰夫（1983）は、新宿の喫茶店名の使用言語について、1962年では割合が日本語＞英語＞フランス語の順であったものが、1983年には英語＞日本語＞フランス語の順となり、使用言語の経年変化を実測している。また、佐藤桂子（2003）は、山形県内の調査から、駅前（旧市街地）では使用文字種に漢字の割合が高く、一方、郊外（ニュータウン）では片仮名・ローマ字の割合が高く、使用文字種に地域差があることを報告している。生活の欧米化や地域社会の人口分布の変動など、社会変化を映す鏡として、景観文字を考察する意義を見出すことができる。

3. 景観調査における利用機器の問題

當山日出夫ほか（2007）では、景観の中の文字・表記を調査するための利用機器として、

GPSの有効性を指摘している。景観文字をデジタルカメラで撮影し、デジタル画像とGPSの位置情報を結びつけることで、デジタル地図に視覚化するというものである。この手法によって、文字分布地図の作成が容易となり、方言学や地理学など地理情報を活用する他の研究領域の成果と結びつけることで、地理的差異という観点からの文字・表記研究の展開を構想している。

ここでは、デジタルカメラで対象物を撮影し、GPSによって測位を行い、デジタル地図にデータを展開する一連の流れを実際に行った場合に、どのような問題が生じたかを、デジタルカメラ、GPS、デジタル地図の三種の利用機器について、具体的に述べてみたい。

3-1. デジタルカメラ

①被写体のある方向

調査者はデジタルカメラとGPS受信機を携帯しているので、GPSの測位位置は調査者の位置、すなわちデジタルカメラの位置である。カメラを据えて遠くのビルの看板や、商店街の全景を撮影した場合、GPSの測位位置が示すものは、被写体の位置ではなくなる。デジタルカメラの位置からどの方向を撮影したのかという情報はGPSから得られないため、別な仕組みが必要である。しかし、カメラと被写体とが近接している場合は、このことはあまり問題とはならない。

②時間の誤差

デジタルカメラで撮影したデジタル画像と、GPSによって取得する時間情報とを結びつけることで、撮影した画像に位置情報を付与することが可能になる。しかし、デジタルカメラは必ずしも電波時計を備えているわけではないので、時間にずれが生じる。30秒のずれは、距離にして数十メートルの誤差になる。調査直前にデジタルカメラの内臓時計を合わせることで、時間のずれ（結果として生じる位置のずれ）を回避することができる。

3-2. GPS

GPSの測位結果は環境に依存し、誤差を生じる。電離層や大気中の水蒸気が測位結果に影響を与える要因の一つとされるが、野外で景観調査を行なう場合、測位結果に最も多大な影響を及ぼすものは建造物である。図2に市街地と郊外でGPS測位を行なった実験結果を示す。市街地のものは2008年3月27日の京急東横線中目黒駅付近、郊外のは2008年4月1日の所沢市南永井地区で採取したGPS測位結果である。使用したGPS受信機は、Globalsat Technology CorporationのDG-100である。中目黒駅前付近の山手通は、地上5階以上のビルが立ち並んでいて、これらの建造物の影響をうけて測位結果に乱れが生じたものと考えられる。一方、所沢市南永井地区は住宅と農地が広がっていて、衛星からの電波を遮る大きな建造物もなく、測位結果は安定している。都市化した市街地でのGPS利用はまだ難しい段階なのであろう。GPS利用者の立場で技術の発達を俟ちたい。

また、大きな建造物がないフィールドでも、GPS の測位結果は数十メートルの範囲内でゆれを生じる可能性がある。そこで、対象物を撮影する際には、撮影場所である程度の時間立ち止まり、測位を複数回行なうか、あるいは、GPS 受信機の測位の時間間隔をあらかじめ短く設定し、測位の回数を増やすなど、測位精度を高めるための工夫が必要である。

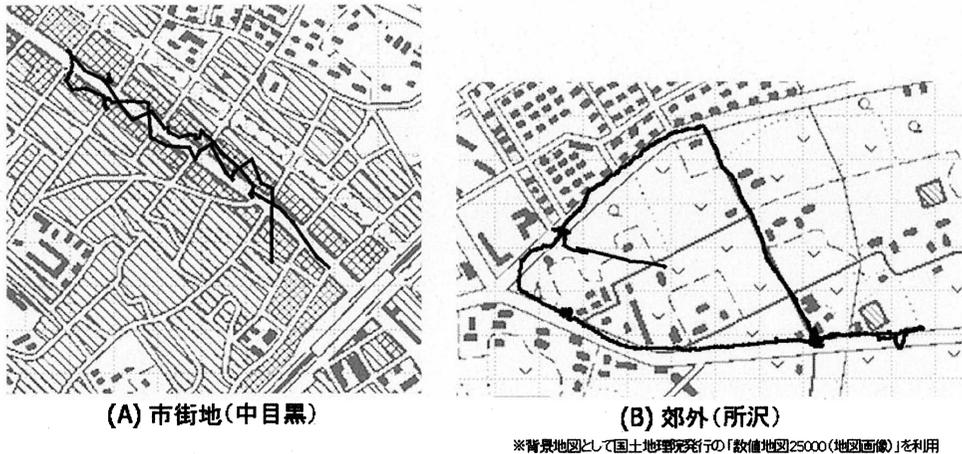


図 2 : GPS 測位結果

3-3. デジタル地図

GPS 測位結果をデジタル地図に展開し、文字・表記の分布を地図上で可視化する。デジタル地図は、国土地理院や地図会社から販売され、対価を払えば利用できる。個人が研究室内で利用するならばこれで十分であろうが、発表や論文など成果公表においては、利用権を得るためさらに対価を支払うなど手続きの必要が生じる。地図会社の市販品を利用する場合は、学術目的であっても例外ではないと考えられる。本稿のデジタル地図は、国土地理院発行の数値地図を購入して利用している。

現代のデジタル地図のみならず、図書などの著作物、写真、古典籍のデジタル画像や翻刻など、学術目的の利用に関わる著作権・利用権との向き合い方は、これからも考えていかねばならない学界共通の問題である。

4. 調査結果の記録

デジタルカメラと GPS を利用することで、サンプル(写真)に対して、サンプル取得の時間と位置を記録することが容易になるとともに、用例に対する付加情報の精度も向上する。しかし、用例そのものの記録である画像、用例を取得した時間、用例があった位置情報の



図 3 : そば屋の暖簾 (調布市深大寺)

三種だけで景観文字の記録が終わるわけではない。図3のそば屋の暖簾（2008年6月24日調布市深大寺で採取）を例として、「そば」の語表記を記述するために、画像・時間・位置のほかに必要な付加情報を列挙すれば、以下のようになる。

語表記の出現形：そば
使用文字種：平仮名
文脈：そば／元祖嶋田屋
店の名前：嶋田屋
表示の種類：暖簾

これらの付加情報に基づいて用例を分類し、デジタル地図にプロットする。デジタル地図にプロットするだけならば市販のツールでも事足りるが、使用文字種と表示の種類でクロスをかけてプロットする、あるいは、画像を見ながら分類したり、プロット後の地図を見ながら再分類を行なったりと、基礎分析の段階ではさまざまな要求が生じる。そこで、基礎分析支援のための可視化・再分類ツールの制作を進めている。将来的には、取得した景観文字画像の管理と活用利用できるようなツールへの発展を目指している。

図4には、現段階での景観文字の記録の流れ、図5には、可視化・再分類ツールの画面を示す。図5の画面上部の地図は、調布市深大寺のそば屋の表示をプロットしたものである。○印は平仮名表記「そば」、△印は漢字表記「蕎麦」、■印は変体仮名表記「楚者」を表している。深大寺での「そば」表記の使用文字種は、平仮名>漢字>変体仮名の順で、変体仮名の使用は例外的であるとも言える。なお、本稿はモノクロ印刷なので分らないが、色彩で表示の種類を表現している。図5の地図は、使用文字種と表示の種類でクロスをかけた結果をプロットしたものである。

5. おわりに

国立国語研究所では、愛知県岡崎市をフィールドとして、敬語敬意表現の経年調査を行なっている。第一回目は55年前の1953年、第二回目は36年前の1972年で、2008年中に第三回目の調査を実施する予定である。この調査は敬語敬意表現を主とする言語生活調査であるが、景観文字を対象とした文字・表記調査も行なわれる。岡崎市はポルトガル語話者が人口の3パーセントを占めている。街路の表示にはまだポルトガル語は少なく、東京や大阪のような大都市の多言語状況には達していないものと見られる。今後、経年的に調査をすることが可能ならば、多言語化の進行を、実時間で記録することができるのではなかと思われる。



図6：愛知県岡崎市のポルトガル語表示

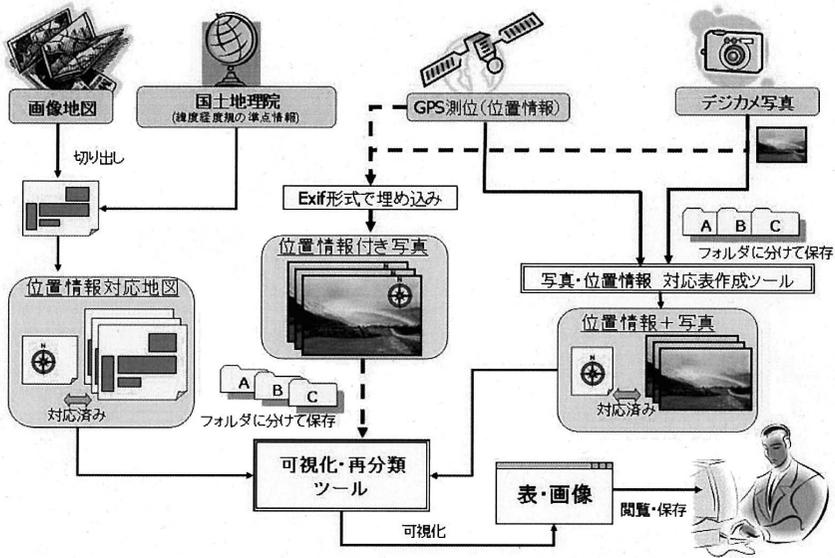


図 4：景観文字の記録の流れ

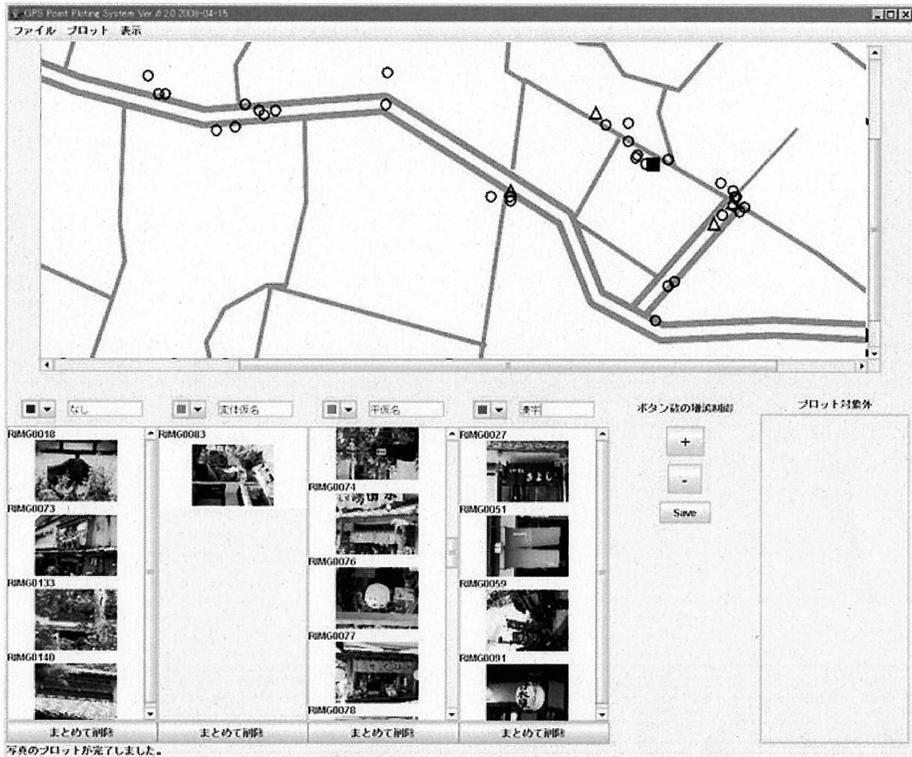


図 5：可視化・再分類ツール（制作中）

参考文献

- [1] エツコ=オバタ=ライマン (2005) 「表記法から観察するビジネス・アイデンティティ——表参道商店街の店名(1)——」『麗澤学際ジャーナル』13-1, pp.39-67
- [2] 国立国語研究所編 (1966) 『戦後の国民各層の文字生活 (国立国語研究所報告 29)』, 秀英出版
- [3] 国立国語研究所編 (1983) 『現代表記のゆれ (国立国語研究所報告 75)』, 秀英出版
- [4] 佐藤桂子 (2003) 「看板の文字」『山形方言』35, pp.1-21
- [5] 笹原宏之・横山詔一・エリク=ロング (2003) 『現代日本の異体字—漢字環境学序説— (国立国語研究所プロジェクト選書 2)』, 三省堂
- [6] 染谷裕子 (2002) 「看板の文字表記」『現代日本語講座 6 文字・表記』, pp.221-243, 明治書院
- [7] 田中ゆかり・上倉牧子・秋山智美・須藤央 (2007) 「東京圏の言語的多様性—東京圏デパート言語景観調査から—」『社会言語科学』10-1, pp5-17
- [8] 高田智和・鎌水兼貴 (2008) 「「略字・俗字」の意識調査」『日本語学会第 136 回大会予稿集』, pp.402-407
- [9] 當山日出夫 (2007) 「京都の「祇園」の表記」『国語文字史の研究 10』, 和泉書院
- [10] 當山日出夫・笹原宏之・高田智和 (2007) 「文字研究における GPS の利用」『情報処理学会研究報告』2007-CH-73, pp.1-8
- [11] 中野洋 (1985) 「看板の文字調査」『計量国語学』15-2, pp.63-70
- [12] 正井泰夫 (1969) 「言語別・文字別にみた新宿における諸設営物の名称と看板広告」『史苑』29-2, pp.166-177
- [13] 正井泰夫 (1983) 「新宿の喫茶店名—言語景観の文化地理—」『筑波大学地域研究』1, pp.49-61
- [14] 宮島達夫 (1995) 「多言語社会への対応—大阪：1994 年—」『阪大日本語研究』7, pp.1-21
- [15] 横山詔一・當山日出夫・高田智和・米田純子 (2008) 「台湾日本語学習者は日本人の字体選好をいかに推論するのか」『情報処理学会研究報告』2008-CH-77, pp.43-50
- [16] Backhaus, Peter (2005) Signs of multilingualism in Tokyo: a diachronic look at the linguistic landscape. *International Journal of the Sociology of Language* 175/176, pp.103-121
- [17] Backhaus, Peter (2006) Multilingualism in Tokyo: A look into the linguistic landscape. *International Journal of Multilingualism* 3-1, pp.52-65
- [18] Inoue, Fumio (2005) Econolinguistic aspects of multilingual signs in Japan. *International Journal of the Sociology of Language* 175/176, pp.157-177
- [19] MacGregor, Laura (2003) The language of shop signs in Tokyo. *English Today* 19-1, pp.18-23